Footprint
フットプリント
写真資料
調査部会発行
H26.10.15
2014年
第16号

「夏ナガサキ原爆写真展」

私からの提言

深堀好敏

恒例となった夏の原爆写真展、テーマを「未来への遺産」とし八月一日から三十一日まで国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開催しました。

展示コーナーのひとつは昨年八月、原爆遺跡として登録記念物に指定された旧城山国民学校校舎、浦上天主堂旧鐘楼、山王神社二の鳥居（一本柱鳥居）、旧長崎医科大学門柱これら四カ所の被爆前、被爆後および現状との比較写真を展示しました。

二つ目のコーナーでは今年六月、長崎市が行った米国国立公文書館の原爆写真調査によって収集した写真の中から、カラー写真を中心に被爆後の生活過程が推測できる写真を展示しました。

会場には観光旅行中と思われる韓国、中国、アメリカ、フランス人の姿があり普段、原爆写真に接する機会が少ないためか興味深そうに見ていました。

また、オーストリア外務省軍縮大使アレクサンダー・クメント氏や長崎市の招待で来崎したパトリシア・マギー夫妻も来場、写真の説明に耳を傾けてくれました。

熱心に見学する、佐世保に入港中の米原子力空母ジョージワシントンの乗組員たち

パトリシア・マギー夫妻に説明する深堀部会長

パトリシアさんは、終戦直後の一九四六～四九年に占領軍長崎軍政部司令官を務めた、ビクター・デルノア氏（1914～1998）の長女で長崎生まれです。私は六月渡米した際にメリーランド大学プランゲ文庫でお会いしており、嬉しい再会となりました。

写真展会場の隣りではカザフスタン共和国のブースが設けられ、共和国内の現況紹介や旧ソ連時代に行われたセミパラチンスク核実験被害による負の遺産について写真や書籍が展示してありました。旧ソ連時代（1949年8月～1989年10月）実に四十年間にわたって四百五十回以上行われた大気圏核実験、地下核実験、水爆実験にはただ驚くばかりで、両手を失った女性の写真を表紙にした図書には胸が痛みました。また地下核実験で平原の中に出現した湖の写真には驚愕すると共に不気味さを感じました

私たちは、ヒロシマ、ナガサキ、第五福竜丸、福島原発については注目を喚起しますが、世界の核保有国が繰り返し行ってきた核実験、水爆実験の蔭で、大量の死の灰を浴びて命を縮め、環礁の島から追い出され、後障害や生活にあえぐ「被曝者」の存在については関心が希薄ではなかったかと反省させられます。長崎原爆の説明を真摯に聞いてくれたカザフスタン共和国の参事官に、いま穴があったら入りたい心境でした。

オーストリア外務省軍縮大使に説明する深堀部会長

会場では「おやこ記者」の取材も受けました。これは、日本非核宣言自治体協議会が全国から八組の親子を選考し、祈念式典に参列したあと分散して被爆者や平和活動をしている高校生、大学の先生、被爆二世、三世を取材し新聞を発行する取組みです。

母親にならい「記者」の肩書の名刺を私に差し出し初対面の挨拶をしてくれた豆記者は、大阪から来た小学五年生でした。私の被爆体験や活動について鋭い質問を受けました。

おやこ記者の質問を受ける部会長

写真展の見学者は多くの市民を始め、外国人、評論家、映画監督などの著名人と多彩な顔ぶれとなりました。

中には「テレビを見て初めて写真展を見に来ました。私はあの日、大橋兵器工場で被爆、その日のうちに救援列車で諫早の病院に運ばれました。三日目に大村海軍病院へ転院、九死に一生を得ました。しかし、熱線の傷痕が残ったため、今でも一年を通して長袖を着用し、真夏でも半袖は着たことがありません。」と話す女性がいたり、「自分の家は爆心地に近い浜口町にあり、被爆翌日から両親と弟の遺骨を探しましたが遂に発見できず、自分は原爆孤児となり生きてきました。テレビを見て今回初めて写真展に来ました。」と語る男性がいました。

このように、今まで堅く口を閉ざしてきた被爆者の心に変化が起きているのでしょうか。

「原爆の実相」「未来への伝言」、義務のような使命感のような何かが良心を揺り動かしているのでしょうか…。

来年迎える戦後七十年とは私たち被爆者にとって、過去に迎えた五十周年、六十周年の節目の年と違い重要な区切りの年になりそうです。

これまで求めてきた核軍縮、核廃絶の道はなお遠い実態ですが、原爆の実相を知る被爆者の責任は重いものがあります。死没者の御霊にいかに応えるか一緒に努力しましょう。

二〇一五年の写真展は、より多くの方に見て戴くため、長崎市立図書館で開催したいと考えています。

今年も米・国立公文書館で調査
新たに長崎原爆写真二〇〇〇点収集

今年の調査は六月十六日から二十七日まで、昨年同様、長崎原爆資料館・奥野正太郎学芸員と長崎平和推進協会写真資料調査部会・深堀好敏部会長が調査収集を行いました。

今回の調査では原爆写真としては数少ない、カラー写真三十点余りを含む二〇〇〇点余りを入手することが出来ました。帰国した二人は、七月四日に記者会見を行い、収集写真の概要をマスコミに説明しました。この席上、奥野学芸員は「カラー写真は退色していたのでパソコンで補正しましたが、この色が当時の色かは断言できません。」と専門家らしい発言が印象的でした。

写真資料調査部会では、早速に、八月一日から国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開催した「ナガサキ原爆写真展」で新収集写真を長崎市民に公開できました。

次ページ紙面に紹介している写真は、写真資料調査部会としても初めて公開する写真で、長崎市長崎病院として仮開院した銭座国民学校や、長崎市中心部・浜町の原爆直後等の珍しい写真です。

なお、今回の調査では、写真のほかに動画や文書資料等の存在も確認でき、継続した調査収集が望まれます。

（担当・堀田武弘）

公文書館で調査中の奥野学芸員と部会長

アメリカ国立公文書館で収集した二〇〇〇枚の写真から①

（担当：堀田武弘）

空撮　銭座国民学校・三菱製鋼所から浦上・住吉方面

画面左手の工場群は手前から三菱造船所幸町、三菱兵器茂里町、三菱製鋼所第一、第二工場。それに沿って国鉄と路面電車の線路が走る。

右手前から中央に走る黒い帯は「御舟川」。戦後、埋め立てられ国道二〇六号線となり姿を消した。写真中央で川の終点右の黒い部分は聖徳寺。その右に銭座国民学校の校舎二棟が見える。

川の右手に並行して伸びる道路は現在の銭座町商店街。

八千代町上空より、爆心地を中心に廃虚と化した北部方面を撮影している。

銭座国民学校（長崎市長崎病院）（爆心地から一・五キロ）

鉄筋の校舎外観は残ったが、内部は全焼した。図書室に保管中の非常用食糧のトウモロコシは、二週間にわたり燃え続けたという。

被爆当時の在籍児童は八五〇人、内五〇〇人が爆死したと推定される。

十月、児童数約四〇人で稲佐国民学校を借り授業を再開した。

昭和二十三年一月旧校舎で授業を再開、この時の児童数は三三四人であった。

学校門柱には「長崎市長崎病院」の看板が掛けられていた。

長崎市長崎病院・内部（銭座国民学校）

戦時防空体制により、銭座国民学校は避難所および救護所に指定され、被災時の炊き出し等、救援救護活動の拠点とされていたが、被爆により全く機能不全に陥った。

昭和二十年九月、壊滅した竹の久保町の長崎市長崎病院が校舎を改装し、応急開院した。

米国戦略爆撃調査団が撮影した映画に、病院内の様子が詳細に記録されている。

窓ガラスはなく降り込む雨や寒風で最悪の環境だったが、被爆者や家族はここを仮住居として生活していた。

山王神社・医大附属医院方面（爆心地から八〇〇メートル）

坂本国際墓地背後の高台からの撮影、これまで例のない撮影位置である。

長崎原爆戦災誌によれば、この一帯は「原爆の炸裂と同時に強烈な爆風でほとんどの建物が倒壊、熱線を受けて同時に火災となり、午後三時頃には山王神社周辺一帯をなめつくした。」という。

九月中旬以降、戻った被災者により一戸二戸とバラックが建ち始め、冬の到来に備えた。

中央左は山王神社の被爆クス、右奥は長崎医大附属医院。

刑務支所の丘（現・平和公園）から南西を見下ろした風景。

●左端の道路は長崎～時津間の県道（現・国道二〇六号線）松山町交差点付近で、右手、城山国民学校方面へ分岐している。

中央路上に停車している赤十字マークの車両は米軍の病院車。

車の左に御大典紀念碑（現在は平和公園内に移設）が見える。

左奥、瓦礫の町で復旧した長崎本線を国鉄列車が走っている。

中央奥の高台には鎮西学院中学校が見える。

大波止交差点付近で休憩中の荷馬車と男性。遠景の警察署右上に廃墟となった県庁の一部が見える。

●中央の建物は大正十二年七月建設の長崎警察署。

隣接する県庁舎は原爆による火災で全焼したが、風向きのせいか長崎警察署は類焼を免れた。「爆風で吹き飛ばされたガラスが室内一面に飛び散り、窓枠がはずれたり壁がはげ落ちたりして、足の踏み場もないくらいだった。」と記録にある。

昭和四十三年、現在地桶屋町へ移転の際、地下倉庫から原爆死没者の死体検視名簿四冊が発見され、一万三〇一四人が検視されていたことが判明した。

浜の町、旧大丸前交差点周辺の状況、手前に散乱するのは解体された商店の廃材と思われる。

●中央白い三階建ては大正末期建築の川島洋装店。現在は浜せんビルの一部となっている。

「長崎浜の町繁盛記（昭和五十八年浜市商店連合会刊）」によると「浜の町は爆心地から約三・五キロにあたる。ここには倒壊家屋はなかったが本通り（現在のアーケード街）はどの家もショーウィンドは砕け、店の中は惨状を極めた。また外観にしても、鉄筋コンクリート建て（安田銀行　現・みずほ銀行）の窓は鉄製の窓枠ごと吹っ飛び、木造建は屋根瓦が飛散し二階の柱は傾き、壁は落ちて見る影もなかった。」とある。

浜の町商店街は土産を求める進駐軍兵士のため十月三日、岡政、浜屋、丸善長崎の三店が開店し、商店街再開のスタートを切った。